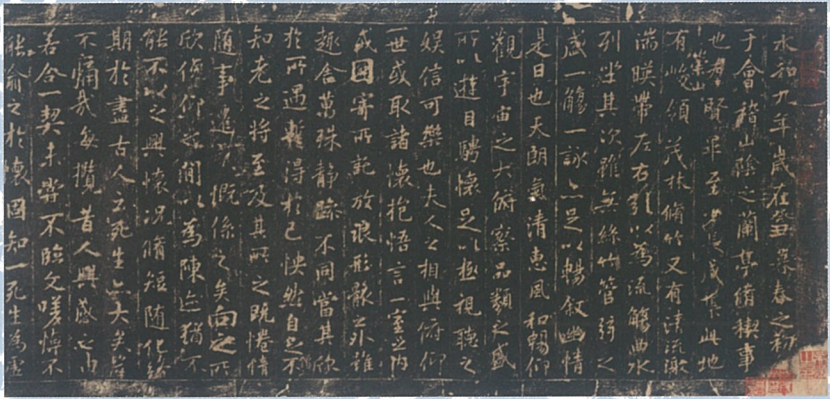


王羲之から空海へ

日中の名筆
漢字とかなの競演



9 王羲之「蘭亭序(呉炳本)」353年 東京国立博物館 Image: TNM Image Archives

●=国宝 ○=重要文化財 ◎=重要美術品
※会期中展示替えのため、掲載作品が展示されていない場合があります。ご了承ください。

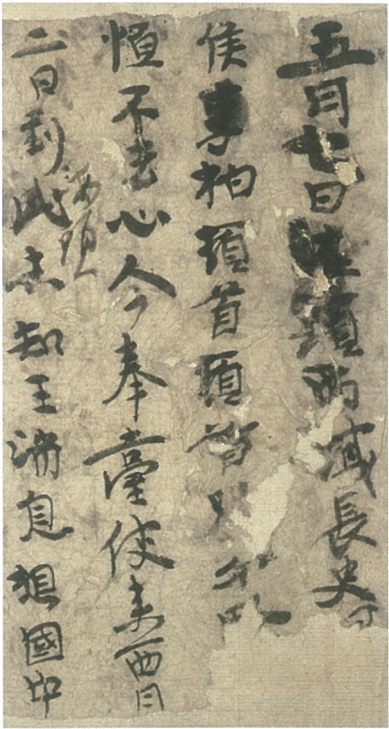
見どころを
紹介するよ!

中国書跡

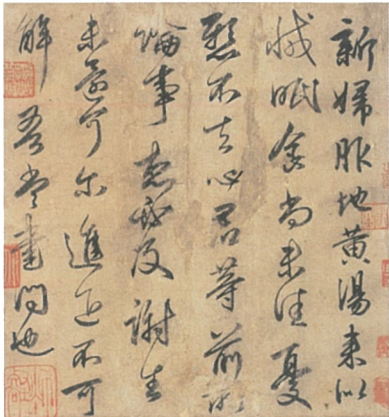
およそ千七百年前、中国の東晋時代に、王羲之という天下第一の書の名人があらわれ、ホンモノは早い時代にすべて失われてしまいました。しかし、唐時代の複製や、石に彫って紙に刷った「拓本」により、今でも王羲之の書のすばらしさを知ることができるのです。

唐の名家たちの著名な楷書の作品も出そろっています。虞世南の「孔子廟堂碑」や、欧陽詢の「九成宮醴泉銘」などがそれです。宋時代以降は、王羲之に学んで新たな表現を打ち立てた大家たちによる「個性の競演」が繰り広げられています。それぞれの時代の書のすばらしさ、すごさが、感動をもつて味わえるでしょう。

王羲之／隋唐

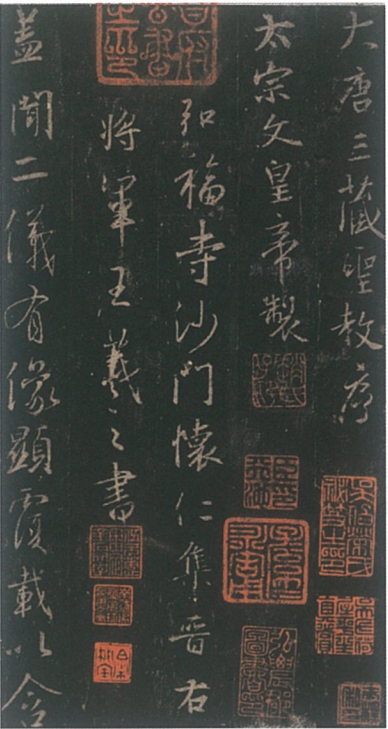


4 ◎「李柏尺牘稿」328～330年
京都 龍谷大学図書館
1909年、日本の探検隊がかつてシルクロードにあった楼蘭(ろうらん)の遺跡で発見した。李柏という役人が書いた手紙の下書き。

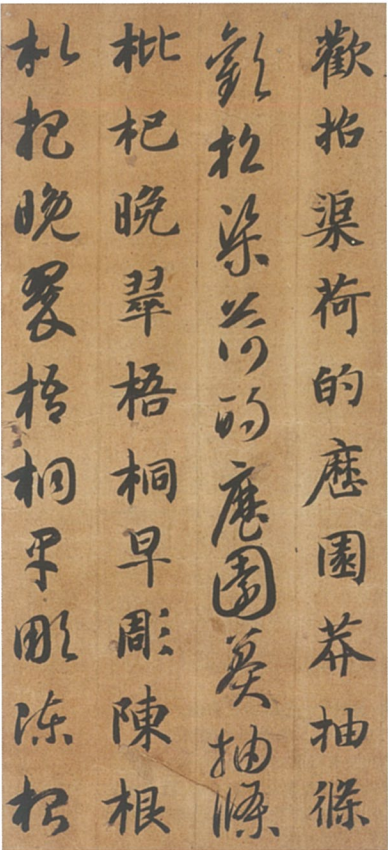


19 王献之「地黄湯帖」4世紀
台東区立書道博物館
王献之は王羲之の息子。「地黄湯」という薬を新婦に飲ませたが、まだ治らない、と書かれている。

26 ◎ 智永「真草千字文」
6～7世紀
「千字文」は、すべて異なる1000の漢字を使って作られた文。これは千字文を楷書と草書で交互に書いている。そのため漢字の学習や書道の手本にも用いられる。

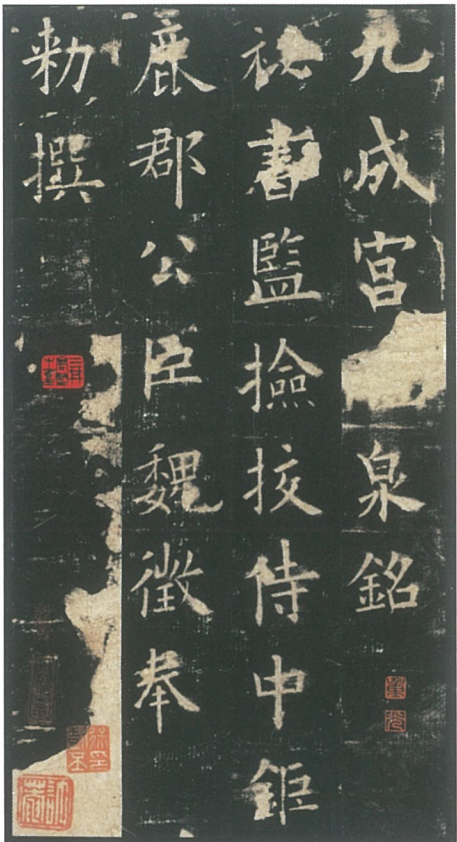


17 王羲之「集王聖教序(黒川本)」672年
兵庫 黒川古文化研究所
王羲之が亡くなった300年後、皇帝が「三蔵法師」として有名な玄奘(げんじょう)の業績を称えた文章を、宮中に遺っていた王羲之の書から文字を集めて石に彫った。



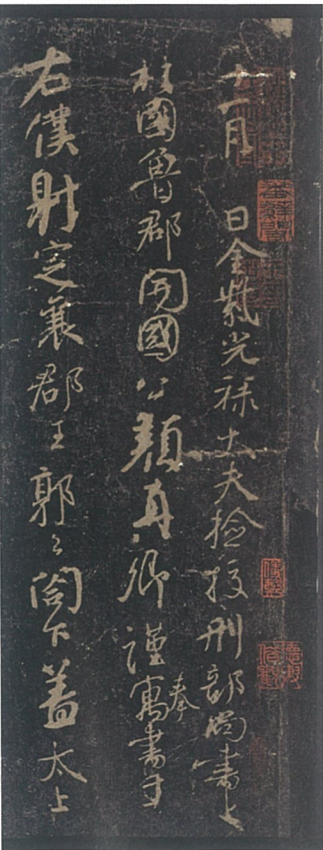
隋唐

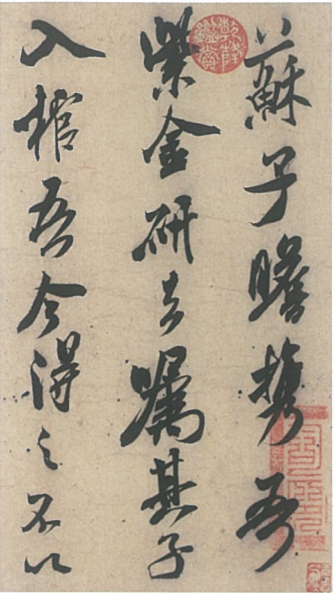
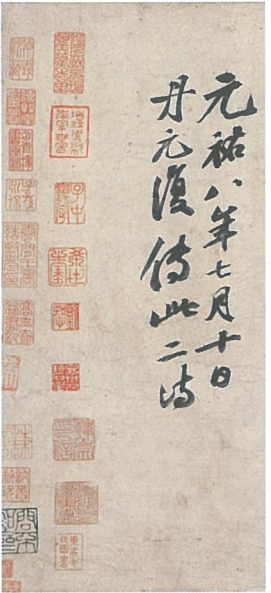
28 虞世南「孔子廟堂碑(臨川李氏本)」
628～630年 東京 三井記念美術館
儒教の聖人、孔子をまつる建物の改築を記念した内容。この臨川李氏本は、世界に唯一残る唐の原碑からとられた拓本。



30 欧陽詢「九成宮醴泉銘(海内第一本)」
632年 東京 三井記念美術館
点や画の書き方、ほっそりとびれた縦長の字などが、書の最高の手本と言われている作品。

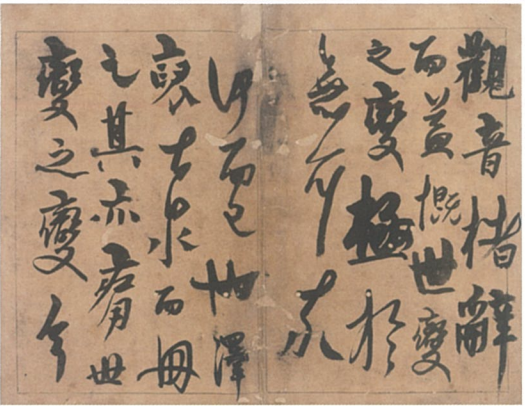
35 顔真卿「争坐位文稿」764年
台東区立書道博物館
宮中の集会で、席の順番を乱した役人に対する抗議文。ゆがんでいたり、急に太くなったりと顔真卿の怒った顔が見えるようだ。



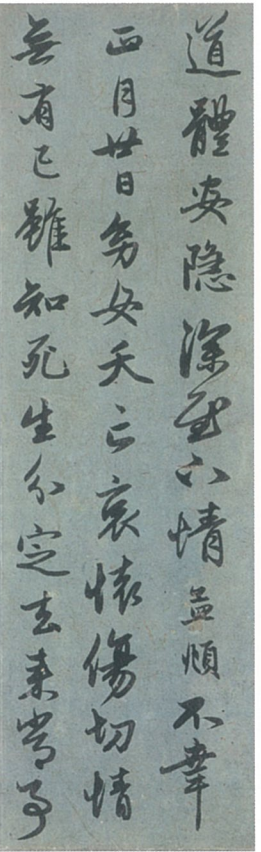


38 ◎ 蘇軾「李白仙詩」1093年
大阪市立美術館
アシや鳥の模様がいった紙に李白の詩を書いたもの。たくさんの朱印は900年以上の間、多くの人が鑑賞し、所有した証拠。

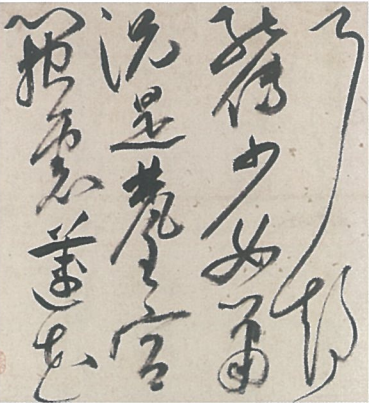
41 米芾「紫金研帖」1101年頃
台北 國立故宮博物院
書をよく学んだ米芾。筆の運びに力とスピード感があり、とてもりりしい。「紫金研」は米芾が大切にしていたすずりのこと。



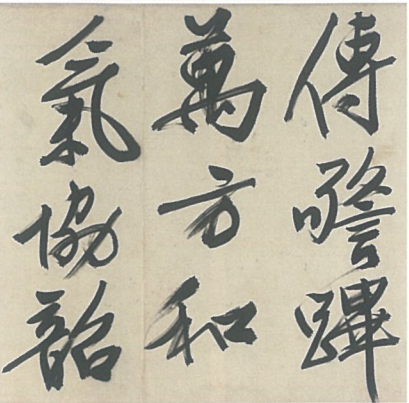
58 楊維禎「錢謙跋語」14世紀
台北 國立故宮博物院
文字が大きかったり小さかったり、はたまた濃いものや薄いもの。自由ほんばうな楊維禎の姿勢が書風からも伝わってくる。



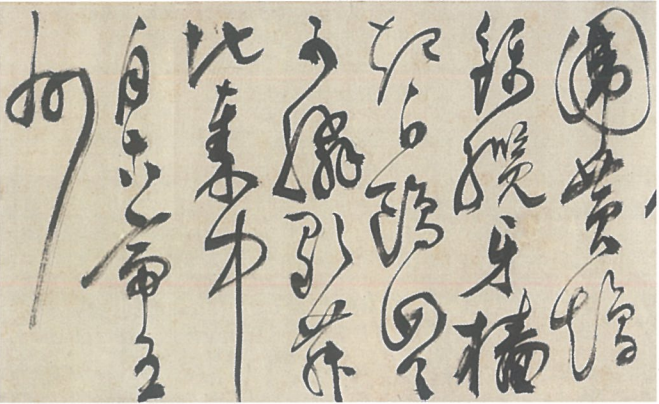
52 ◎ 趙孟頫「與中峰明本尺牘」
14世紀 東京 静嘉堂文庫美術館
尊敬する僧に宛てて、日々の思いをつづった手紙。これは、幼い女の子が亡くなったことを書いています。文字から悲しみが伝わるようだ。



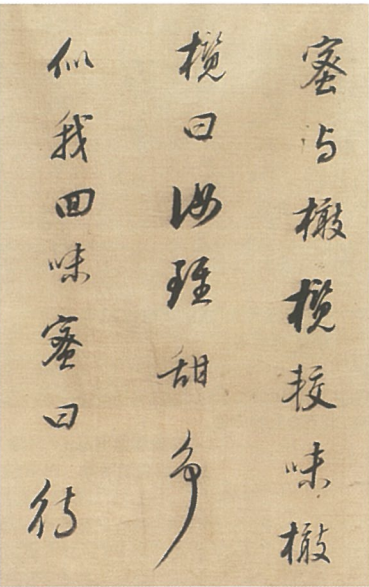
64 祝允明「草書七言律詩」1525年
台北 國立故宮博物院
66歳の時に書いたもので、大胆で自由だが、書の基本を学んだうえでの工夫である。最初の文字は「耳」。



67 文徵明「自書七言律詩」16世紀
台北 國立故宮博物院
一文字が10センチ四方もある作品。文字どうしが近くても、横長の線や点がうまく並べられている。

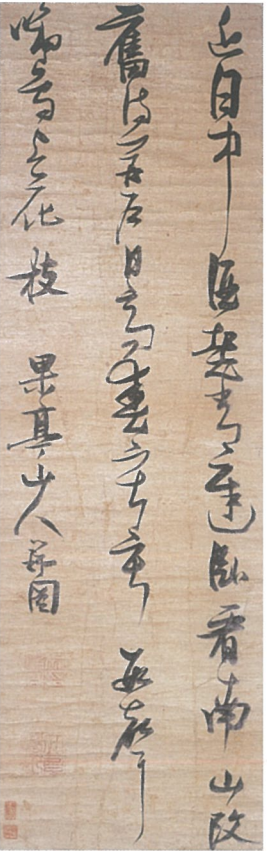


69 陳淳「草書杜甫秋興詩」1544年
台北 國立故宮博物院
年を取るにつれて、大胆な書き方をした陳淳。これは亡くなる少し前の作品で、小さなことにこだわらない性格が表れている。

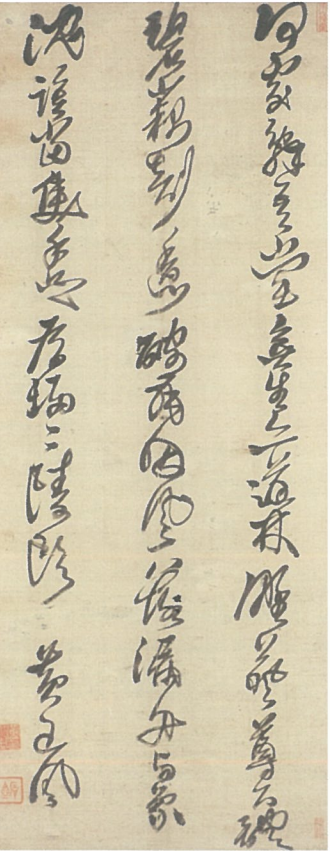


「橄欖(かんらん)」はオリーブのことだよ。

75 董其昌「行書崑山道中書」
17世紀 三重 澄懷堂美術館
旅の途中で、昔話やスイーツのことわざなど、短い文を書いたもの。おだやかで、ゆったりと筆を取る姿が浮かんでくるようだ。



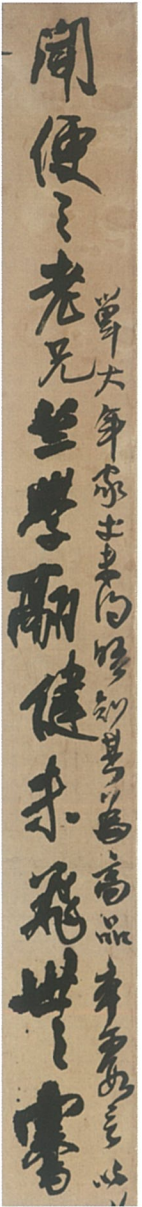
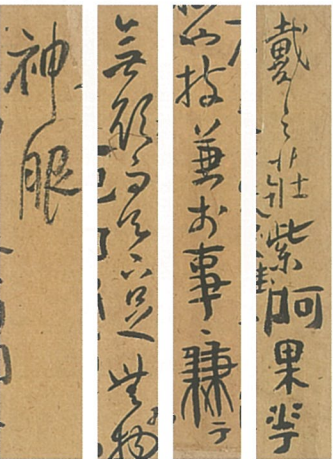
78 張瑞圖「行書七言絕句」
17世紀 徳島県立文学書道館
筆の先を上手にを使って、細い線やハネが工夫されている。2行目の下は「声」という字。



80 黄道周「草書答孫伯観詩」17世紀
三重 澄懷堂美術館
書を学ぶことにそれほど執着はなかったというが、とても達筆。字と字の間を詰めて、右肩あがり。見ていると、筆の速さが伝わってくる。

88 傅山「齋廬妙翰」1652年頃
台北 何創時書法藝術基金會
友人の弟に頼まれて書いたもの。あらゆる字のスタイル、古代の文字だけでなく、傅山みずから作ったという字も書かれている。

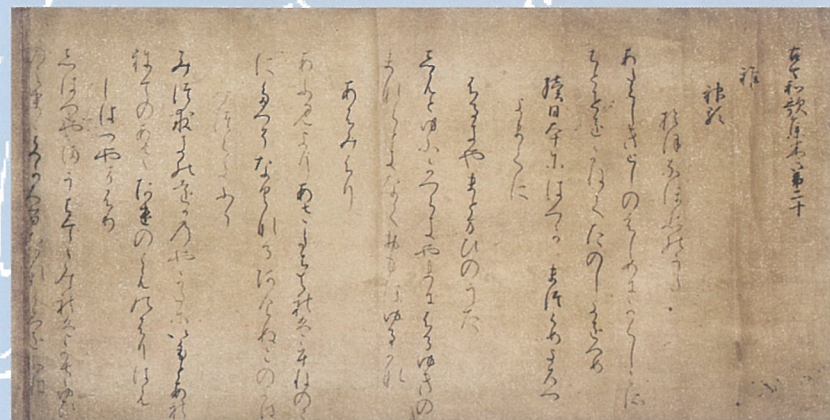
右端の一番下の字は「華」という字。



83 王鐸「行書贈準大年家文」1647年
台北 何創時書法藝術基金會
筆にたっぷりと墨を含ませて書かれた文字は、抑揚と独特のにじみを生んでいて面白い。縦に見ていくとリズムよく文字が左右に振られている。王鐸の個性が光る逸品。

王羲之から空海へ

—日中の名筆—
漢字とかなの競演



127 ● 伝紀貫之「高野切第一種(古今集巻第二十)」11世紀 高知県立高知城歴史博物館

●=国宝 ○=重要文化財 ○=重要美術品
※会期中展示替えのため、掲載作品が展示されていない場合があります。ご了承ください。

見どころを
紹介するよ!

日本書跡

空海と最澄は唐に渡って王羲之などの書を学んできました。《風信帖》と《久隔帖》は二人の間で交わされた達筆の手紙です。遣唐使停止後は小野道風・藤原佐理・藤原行成の「三跡」が和様という温和な漢字を残しました。

平安時代中頃には和歌を美しい紙(料紙)に書いた「古筆」が出現しました。代表的なものに《高野切》があります。古筆の多くは後世分割され、それらの断簡を切といいます。

奈良時代以降の写経も見事です。聖武天皇の勅命で書写された《金光明最勝王経》は、その最高峰ともいえるべき名品です。鎌倉・室町時代以後の多彩な書も楽しんでください。

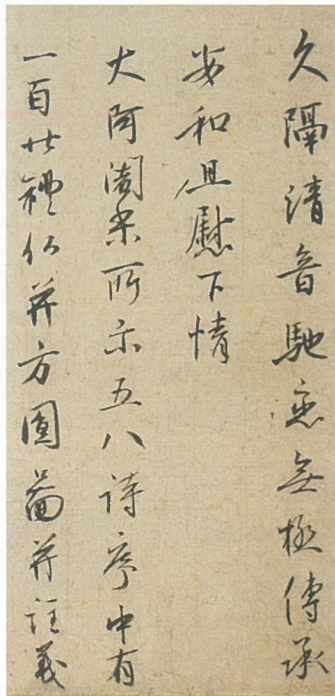
写経／三筆と最澄

クローズアップ!

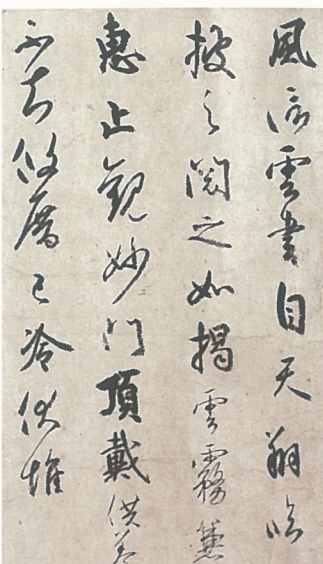


金光明最勝王經減業障品第五
三蔵法師玄奘奉制譯
今時世尊住正舍別入於甚深微妙靜慮從
身毛孔放大光明無量百千種種諸色諸佛
刹主悉現光中十方恒河沙校量辭喻所不

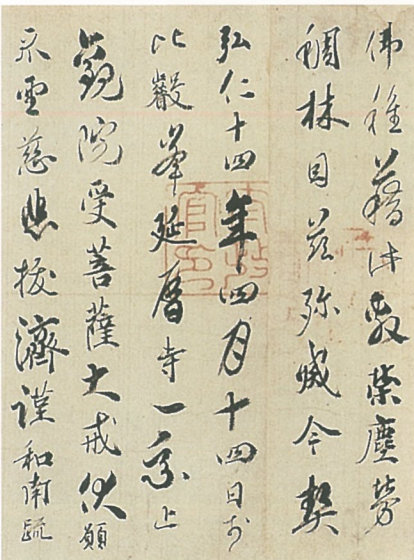
93 ● 「金光明最勝王經 卷第三・卷第四」
8世紀 奈良国立博物館 (撮影:森村欣司)
紫色に染めた紙に、金字でお経を書いている。金がきれいに輝いているのは、イノシシの牙で磨いたため。



110 ● 最澄「久隔帖」813年
奈良国立博物館 (撮影:森村欣司)
最澄は、空海と並ぶとても偉いお坊さん。これは、たった一つしか残っていない最澄の手紙で、空海に宛てて書かれたもの。

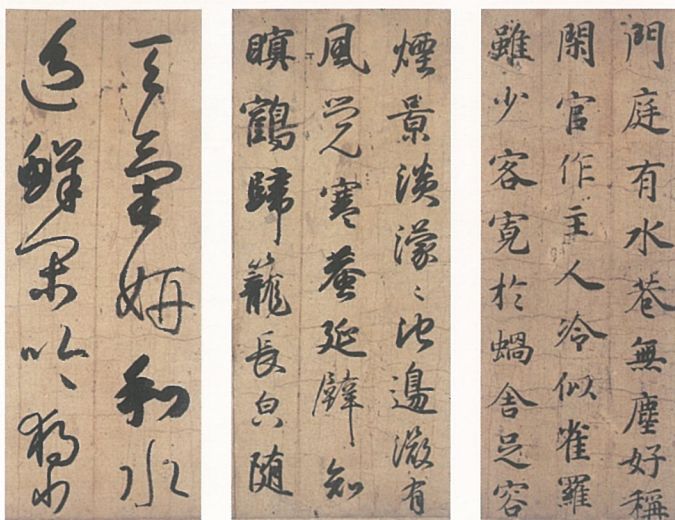


104 ● 空海「風信帖」9世紀
京都 東寺(教王護国寺)
Image: TNM Image Archives
空海から最澄への手紙。中国の書法を日本に伝えた空海が、810～813年頃に書いた、もっとも有名な作品。

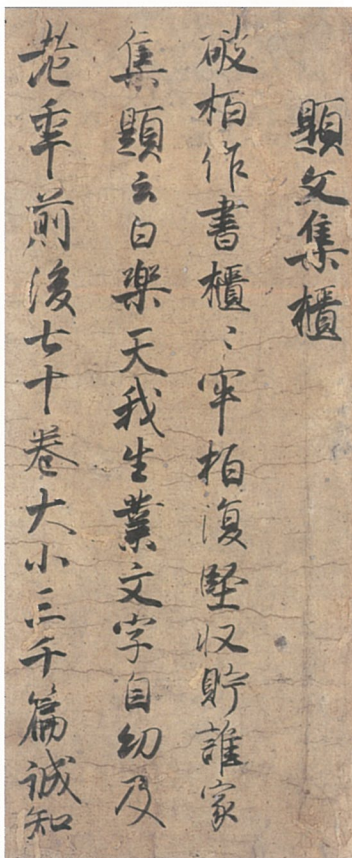


111 ● 嵯峨天皇「光定戒牒」823年
滋賀 延暦寺
最澄の弟子の光定が、延暦寺で、一人前の僧として戒律を受けたことを証明する文書。天皇の直筆の書。

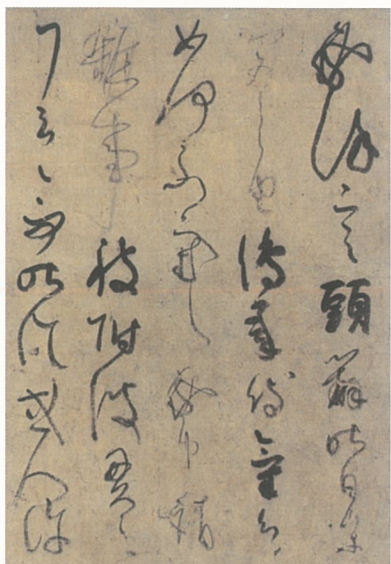
三跡



112 ● 小野道風「三体白氏詩卷」
10世紀中期 大阪 正木美術館
「三体」とは、楷書・行書・草書の3通りのスタイルで書いているということ。それぞれ見比べると、面白い。



116 ● 藤原行成「白氏詩卷
(後嵯峨院本)」11世紀前期
大阪 正木美術館
平安時代、大人気だった中国の詩を書いたもの。藤原行成は、日本の書道の流れをつくった重要な人で、この作品は代表作。



115 ○ 藤原佐理「頭弁帖」998年
ふくやま書道美術館
役人だった藤原佐理が、苦情を訴えている文書。怒りや悔しさ、いろんな気持ちがそのまま、筆の先から表れている。

比べてみよう！

(右より)

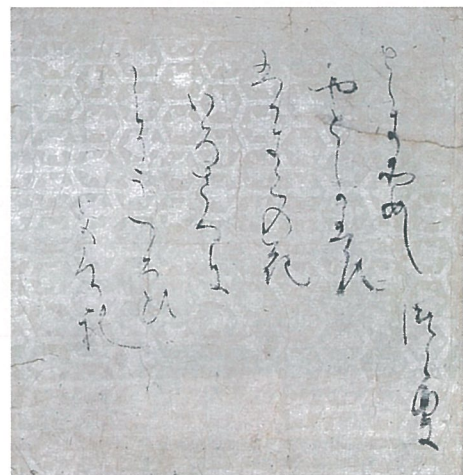
126 ◎ 伝紀貫之「高野切第一種」 福岡 石橋美術館

135 ◎ 源兼行「高野切第二種」 山口 毛利博物館

142 伝紀貫之「高野切第三種」 兵庫 香雪美術館

いずれも11世紀中期

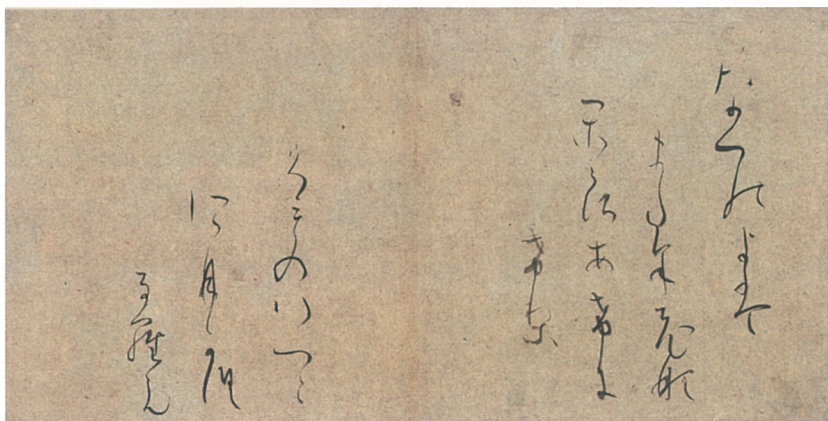
「古今和歌集」を書き写したもので、元々は同じセットの巻物だった。高野山に伝わったので「高野切」。3人で分担して書いたため、字の雰囲気が異なっている。



154 伝紀貫之「寸松庵色紙(古今集)」

11世紀後期 東京 静嘉堂文庫美術館

四角い紙の上で、空間を自由にアレンジした書き方。「散らし書き」というもので、かなの新しいスタイルを切りひらいた。



157 ◎ 伝小野道風「継色紙(古今集)」

11世紀後期 東京国立博物館

Image: TNM Image Archives

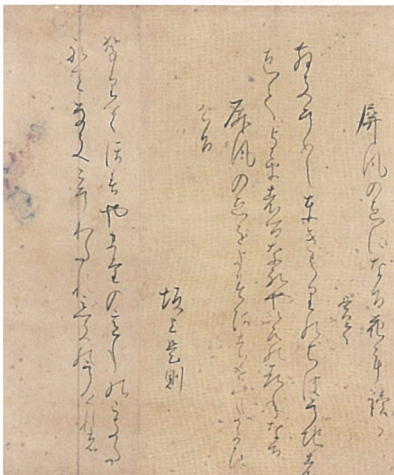
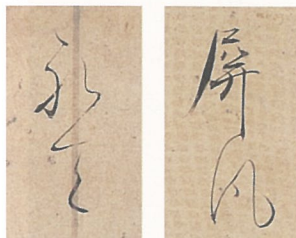
1行目を高く、つづく行を低くと、高さを変えることで山のかたちのように並べてリズムを出している。下の句(左側)は上の句(右側)より小さな山型になっている。

古筆Ⅱ／平安末・鎌倉

178 藤原定実(推定)
「筋切・通切(古今集)」

12世紀初 兵庫 遼翠美術館

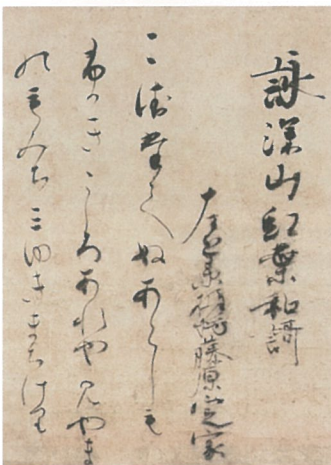
右半分は、ふるいの目のような網目模様の紙。ふるいのことを「とおし」と言うから、「通切」と呼ばれている。左半分の紙は、銀で引かれた縦線があり、筋のように見えるから「筋切」。



182 藤原定信「石山切貫之集下」1112年

京都 北村美術館

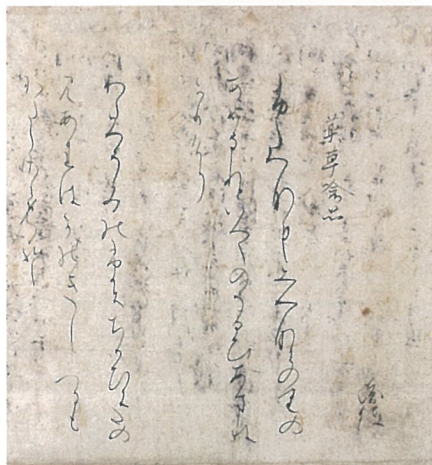
紙がとても美しい。色々な紙を継ぎはぎしたり、細かい金ばくをまいたり。当時のおもてなしのひとつで、おしゃれ。



195 ○ 藤原定家「熊野懐紙」

1201年

すぐれた歌人で知られる藤原定家。線の太細の変化に富む定家スタイルは、今でも書の世界で生き続けている。

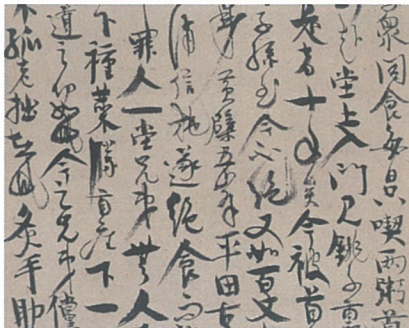


192 ◎ 西行「一品経和歌懐紙」

1182年頃 京都国立博物館

お経の内容を和歌にしたもの。平安時代から鎌倉時代の有名なお坊さん、西行が書いたもの。右下は「円位」という字で、西行のもうひとつの名前。

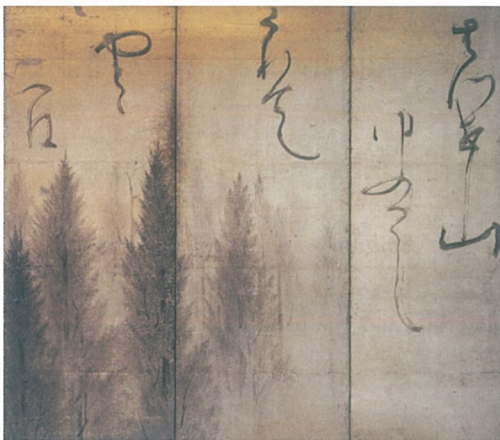
墨跡／寛永の三筆と大雅・良寛



199 一休宗純「虚堂智愚普説語」15世紀

東京 出光美術館

「一休さん」でおなじみ。僧のあるべき姿を求めて厳しく批判する一休の字は、他の人と大きく違い、個性で力強い。



203 近衛信尹「檜原図屏風 いろは屏風」16世紀末

京都 禅林寺

一首の歌うち一句はあえて書かないで、屏風の絵で表現して作品に仕上げた。林の絵と、文字のコンビが見事。

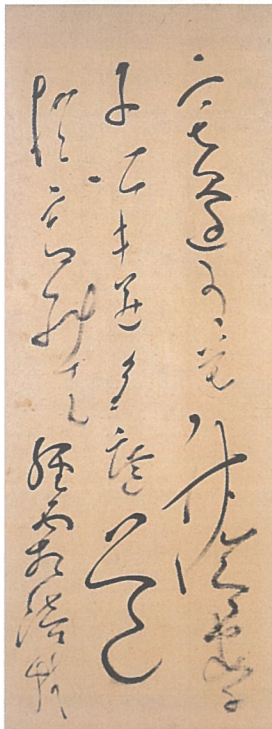


204 本阿弥光悦「花卉蝶摺下絵新古今集和歌巻」

17世紀前期 京都 野村美術館

色違いの紙をつないで描かれた梅やツタは、金や銀をたくさん使った版画による下絵。そこに和歌を書いたこの巻物は、400年近く経ってもきれいにのこっている。

「三輪の檜原に」
という句を
絵で表現



209 良寛「詩書屏風」19世紀前期

東京 西新井大師

お坊さんの良寛は書家としても有名で、王羲之の書などもよく勉強した。この作品の字は、とても自由で、のびのびとしている。たくさん勉強したからこそ、自分らしさを表現できた。